

これは名案二つ池（大川瀬）

九鬼の殿さんが、鳥羽から三田へ来られて何年かたったころのこと——。

三田藩ととなりあう篠山藩との間では、領地の境をめぐるもめごとがたびたび起こりました。境となるあたりは、土地が入り組んでいて、区切りがはっきりしていなかったのです。

篠山藩は徳川家の家臣である譜代大名※で領地が六万石ありましたが、外様大名※の三田藩は三万六千石しかありませんでした。そんな二つの藩が争っても、三田藩に勝ち目はありません。

九鬼の殿さんは、どうしようかと悩みましたが、よい方策が見つかりません。家老や老臣たちにも相談をしましたが、なかなかよい案が浮かびません。

そのうち、殿さんは急に腹痛を起こして、かわや（便所）へ飛びこみました。腹痛がおさまってかわやを出た殿さんは、小姓の差し出したひしゃくの水で手を洗いました。かたわらをふと見ると、さらさらと手水鉢から水があふれて

庭を流れているではありませんか。

これを見た殿さんは、「これだ、これだ。」と、明るい表情になりました。

急いで、家来たちのところへもどり、

「ため池を作り、上のため池から下のため池へ水を流し、その二つの池の水がかかるところは三田領としてはどうか。」

と言いました。

「さすがは殿。名案でございます。」

みんなは口々に言いました。

殿さんは気をよくして、

「時には、腹痛をすることよのう。

善は急げじゃ、一日も早く工事にかかれるように手配をいたせ。」

と、お腹をさすりながら命じました。

すぐに家臣たちは資材をそろえ、篠山藩にこのことが知られないように、国の境にあたる梅の木峠に集まりました。

総奉行がみんなに向かつて、

「全体を上組と下組の二つに分ける。上組の指揮は作事奉行、下組の指揮は代官とする。」

賃金は一人三文^{もん}じゃ。なまけてあまり働かない者は一文、精を出してよく働く者は五文を与える。

その上、早くできた方の組に、さらに殿からほうびがいただけるぞ。」

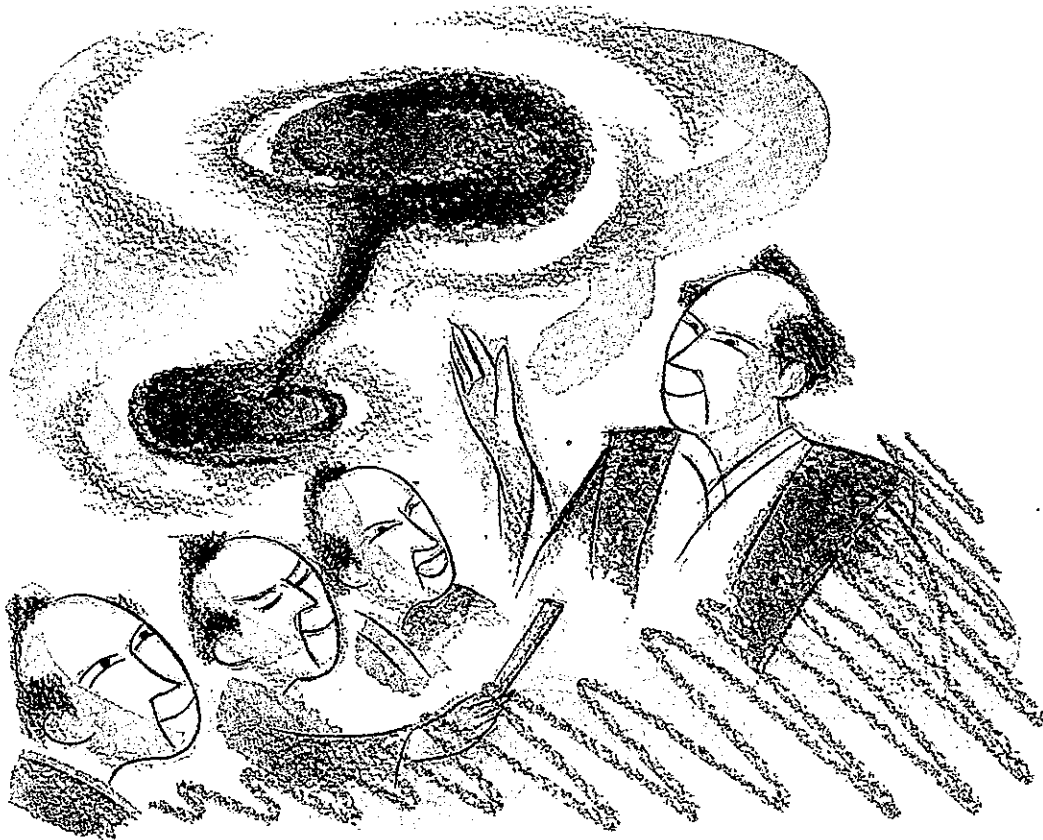
「さすがは九鬼の殿さんだ。力いっぱいがんばろう。」
総奉行の合図と同時にみんなは一斉^{いっせい}に仕事にかかりました。

土を掘り、その土を運ぶ。池の堤^{つつま}を作り、固める。「自分の組の方が早く仕上げるぞ」という思いで、だれもかれもが汗水たらしてよく働きました。土はどんどん掘られ、堤はみるみる高くなり、一晩のうちに二つの池ができあがりました。

このように、二つの池を競争して作らせることで、池はあつという間にできあがりました。

そして、その水のかかる田畑は三田藩の領地となり、篠山藩との争いは、ようやくおさまったということです。

※譜代大名と外様大名：関が原の戦の前から徳川家の家臣であった大名が譜代大名。外様大名とは、徳川家の本来の家臣ではなく、関が原の戦以降に徳川家に従った大名のこと。



譜代と外様では、幕府の役職・訴訟・課役などさまざまな面で、扱いに差があった。